

今月のことば

我が輩は
凡夫である
自覚は
まだない

(専光寺掲示板)

龍谷大学非常勤講師
小池 秀章 こいけ ひであき

「輝け！お寺の掲示板大賞」をご存知でしょうか？これは、仏教伝道協会の企画で、お寺の掲示板の写真を、ツイッターやインスタグラムに投稿し、その標語内容の有難さ・ユニーク・インパクト等によって入賞を決定するというものです。2020年の「仏教タイムス賞」に選ばれたのが、「我が輩は 凡夫である 自覚はまだない」(専光寺掲示板)という言葉でした。これは、夏目漱石の小説『我が輩は猫である』の冒頭「我が輩は猫である。名前はまだない。」をまねて創られた言葉です。ここでは、「凡夫」を「ヒト」と読ませていますが、通常は、「ほんぶ」と読みます。漢字の意味通り受け取ると、「平凡な人」という意味になります。親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫」、つまり、「煩惱が充分具わっている愚かな人間」という意味で使われています。そして、その凡夫とは、仏さまの光りに照らされて(仏さまのみ教えを聞いて)明らかにになった自らの姿である、と受け取られているのです。

私たちは、自らが凡夫であるということに気づいていません。煩惱に振り回され、お互い傷つけ合っているにも関わらず、それが普通だと思ってしまうんです。しかし、仏さまから見たらそれはとても痛ましい在り方なのです。そして、仏さまは、そんな私たちを放っておかず、私たちを正しい方向に導こうとはたらき続けてくださっているのです。

仏さまのはたらきによって、「私は凡夫である」と気づかされたからといって、凡夫であることをやめることが出来るわけではありませんが、そこに、今までとは違った世界が開けてくるのです。

合掌